国立国語研究所学術情報リポジトリ

喜界島南部・中部地域のアクセント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002429

喜界島南部・中部地域のアクセント

窪薗晴夫

１　はじめに

２０１０年９月に行った喜界島方言合同調査をもとに、島の南部・中部地域（湾（わん）、中里、上嘉鉄（かみかてつ）、阿伝（あでん）、坂嶺（さかみね）、塩道の６集落）について、そのアクセント体系を概観する。本稿の前半では先行研究（上野 2000, 2002a）を参照しながら湾と中里の２集落のアクセント体系を分析し、後半では、この２集落との異同を中心に他の集落の体系を記述・分析する。北部方言（小野津）については上野（2002a/b）を参照されたい。

２　中里方言、湾方言

２．１　先行研究

喜界島・湾集落のアクセントについては上野 (2000, 2002a)が分析している。この研究によると、湾方言は鹿児島方言や長崎方言と同じく、語の長さに関わらず２つのアクセント型（以下「ア型」）しか持たない２型アクセント体系である。ただし、鹿児島や長崎のＡ型、Ｂ型とは所属語彙が一致しないこともあり、上野はα系列、β系列という呼び方をしている。つまり、湾方言はα系列とβ系列の２型アクセント体系を持つ。

上野 (2000, 2002a)によると湾方言は音節ではなく拍（＝モーラ）を基本単位として音調（トーン）の付与がなされる。この点において、長崎方言や甑島方言（鹿児島県）と基本的に同じであり、音節を基本単位とする鹿児島方言とは異なる（坂口 2001; 上村 1937, 1941; 平山 1951, 木部 2000, Kubozono 2010, 2011a/b）。

次に、α系列とβ系列の違いであるが、α系列は文節単位で、各文節の次末拍のみ低くなる。鹿児島方言や長崎方言と同じく文節をドメイン（付与範囲）として音調パターンが付与されるから、名詞単独であれば、その名詞の語末から二つ目の拍が低くなり、他の拍は高くなる。名詞に助詞が付くと、助詞の最後から二つ目の拍が低くなる。これに対し、β系列は文節単位ではなく語をドメインとして音調が付与され、語の次末拍の前でピッチが上がる。つまり東京方言と同じように、語をドメインとして音調パターンが決まる。ただし語の長さに関わらず、後ろから３つ目の拍が低く、その次の拍が高くなる。２つの系列を比較すると次のようになる（○は名詞、△は助詞の１拍を表す）。

（１）a. α系列：○○、○○○、○○○○、○○○○△、○○○○△△
（所属語彙：水、鳥、鼻、洞窟（がまぐち）、煙、踊り、形、鋏、雷、暁…）

b. β系列：○○○○、○○○○△、○○○○△△
（所属語彙：海、鍋、舟、臼、刀、畑、天井…）

２系列の全体像を比較すると表１のようにまとめることができる。α系列とβ系列のドメインの違いは、前者が早田 (1999)のいう語声調(word tone)的な特徴を、後者が語アクセント的な特徴を持っていることを意味する。つまり同一体系の中に、鹿児島方言のような語声調と東京方言のような語アクセントが混在していることになる。

表１

	音調の担い手 (tone bearing unit)	ドメイン (domain)	
α系列	拍	文節	次末拍が低い
β系列		単語	次末拍が高い

また音調の担い手(tone bearing unit)をもとに２型アクセントの諸方言と比較すると表２のようになる[1]。この違いは上記の語声調 vs. 語アクセントの区別とは直接関係しない。

表２

音節単位	鹿児島、（甑島）
拍単位	長崎、甑島、喜界島・湾方言

話を湾方言に戻すと、上野 (2000, 2002a)は（１）に示した２つの音調パターンに対し、次のような音韻論的解釈を提案している。

（２）a. α系列：文節の次末拍だけ低い無核型
b. β系列：単語の次末拍に昇り核がある

まずβ系列ではピッチの上昇位置が有意であり、単語の次末拍（後ろから２つ目の拍）がその核（昇り核）を担う位置として指定される。これに対しα系列でもピッチの上昇が起こるが、この上昇は音韻的に有意なものではく、文節の次末拍が低くなることが有意義な特徴と解釈される。

[1] 甑島（手打方言）は語頭部分が音節単位、語末部分が拍単位で音調が付与される（Kubozono 2010, 2011a/b）。

２．２　調査

今回の合同調査では湾集落において２名のインフォーマント、その南隣にある中里集落において２名のインフォーマントからアクセントデータを収集した。本稿で報告するのは筆者自身が調査を行った中年男性話者２名（各集落１名）[2]のデータである。

この２名の話者について、単語と文節の言い切り形と文の読み上げ調査を行った。文節とは、名詞に助詞の「が、から、まで、からも、までも」を付けた形であり、文とは、語や文節の後にさらに文節が続く形（いわゆる「接続形」）である。調査は調査表に記載された調査項目（単語・文節）を２回ずつ読み上げてもらい、それをデジタル録音機に録音しながら同時に書き取るという方法で行った（３節以降で紹介する他の集落についても同様である）。

２．３　α系列

２．３．１　調査結果

まず以下の２拍名詞について述べる。調査語彙の右肩に①, ③とあるのは類別語彙の第１類、第３類に所属することをそれぞれ意味する。鹿児島、長崎方言でいくと２拍第１類はＡ型、第３類はＢ型となる。

（３）水(midu)①　、鳥(tui) ①、鼻(hana) ①、洞窟(gama)；
　　山(jama)③、花(pana) ③、豆(mami)、麦(muni)

これらの語彙は次のような音調パターンを示す。以下、「。」は言い切り形を、「…。」は接続形を表す[3]。

（４）言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。
　　○○からも。○○までも。
　　接続形：　○○が…。○○から…。○○まで…。○○からも…。○○までも…。

３拍名詞については次の語彙のアクセントを調べた。④は類別語彙の第４類を意味する。３拍第１類は鹿児島・長崎ではＡ型、第４類はＢ型となる。

（５）　煙(hibuɕi) ①、踊り(udui)、形(katatɕi) ①；

[2] 中里集落のインフォーマントは得田喜代治氏（1957 年 5 月生まれで調査時に５３歳）、湾集落のインフォーマントは岩田進氏（1953 年 1 月生まれ、調査時５７歳）である。
[3] 上野善道氏の以前の調査では、湾方言と中里方言では接続形の音調パターンが若干異なっていたそうである（上野 2000）。今回はデータが足りず、この点を確認できていない。

鋏(hasami) ④、鏡(hagami) ④、暦(kujumi) ④

これらの語彙は次のような音調パターンを示した。

（６）言い切り形：　○○○。○○○が。○○○も。○○○から。○○○まで。
○○○からも。○○○までも。
接続形：　○○○が…。○○○から…。○○○からも…。

４拍名詞は雷(kaɴnari)と暁(a:tutɕi)の２語である。これらの語彙の音調パターンは次の通りである。

（７）言い切り形：　○○○○。○○○○が。○○○○も。○○○○から。
○○○○まで。○○○○からも。○○○○までも。
接続形：　○○○○が…。○○○○から…。○○○○からも…。

２．３．２　分析

（４）、（６）、（７）の結果は（１ａ）で述べた上野 (2000, 2002a)の報告と一致している。すなわち、文節をドメインとして、最後から二つ目の拍だけが低くなり、他の拍は高く発音される。また、言い切り形と接続形の間に違いはない。後述するβ系列とは違い、言い切り形の末尾拍が低くなることはなく、言い切り形も接続形と同じく文節末の拍は高い。

ここで Goldsmith (1976)や Haraguchi (1977)の自律分節音韻論(Autosegmental phonology)の枠組みで分析すると、α系列の基本メロディー(basic melody)はＨＬＨであり、文節をドメインとして末尾から（右から左へ）この基本メロディーを拍単位で付与すると正しい音調が得られる。文節が４拍以上の長さを持つ場合には、左端のＨ音調が右から左へ拡張(spread)することになる（] はドメインの右端を表す)。

（８）　…μ　μ μ μ]$_{文節}$
＼｜｜｜
ＨＬＨ

ここで、○○○や○○○○という音調が許容されないことを強調しておきたい。上野(2000, 2002a)の分析―上記の（２ａ）―にあるように、低いのは当該文節の次末拍だけであり、その前の拍はすべて高くなる。インフォーマントは「はなが」（鼻が）や「かたち」のような音調に対して一様に否定的な反応を示しており、次末拍の前は必ず高くなくてはいけない。「鼻が」や「形」には○○○という音調しか許容されないのである。

２．４　β系列

２．４．１　調査結果

β系列については次の語彙についてアクセントを分析した。これらは鹿児島方言、長崎方言においてＢ型アクセントをとる語彙である（たとえば「海」は両方言で「うみ」と発音される）。

（９）　a. ２拍名詞

海(umi) ④、鍋(nabi)、舟(huni)、臼(usu) ④、太陽(tida)

b. ３拍名詞

刀(hatana) ④、畑(hate:) ④

c. ４拍名詞

若い娘(me:rabi)、天井(tɪnʑo:)、かまきり、紫

これらの調査語彙に対して得られた音調は次の通りである（「～」は語彙間、発話間あるいは話者間に揺れがあることを表す）。上野 (2000, 2002a)の記述と一致する。

（１０）a. ２拍名詞

言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。
○○からも。○○までも。
接続形：　○○が…。○○から…。○○からも…。

b. ３拍名詞

言い切り形：○○○。○○○が。○○○も。○○○から。○○○まで。
○○○からも。○○○までも。
接続形：　○○○が…。○○○から…。○○○からも…。

c. ４拍名詞

言い切り形：○○○○。○○○○が（～○○○○が）。○○○○も。
○○○○から。○○○○まで。○○○○からも。○○○○までも。
接続形：　○○○○が…。○○○○から…。○○○○からも…。

２．４．２　分析

α系列とは異なり、β系列では言い切り形と接続形が異なる音調を持つ。言い切り形と接続形に共通するのは、「文節」ではなく「単語」の最後から３つ目の拍（－③）が低くなり、この拍とその後ろの拍（－②）の間でピッチが上昇することである。語が２拍以下の長さしかない場合（つまり－③がない場合）には、語頭（つまり－②）から高く発音されることになる。

接続形の場合には、―③だけが低くなり、助詞も含め他の拍はすべて高くなる。２拍名詞の場合には、文節全体が高くなることになる（たとえば「うみから…」）。これに対し、言い切り形では、―③に加え、文節末の拍も低くなる。２拍名詞が単独で発音される場合には、○○（たとえば「うみ。」）となる。このように、文節末の拍が低くなるか否かという点において、言い切り形と接続形が区別される。

言い切り形の音調が文末を表す文レベルの音調(boundary tone)であると解釈すると、上野(2000, 2002a)が主張するように、－③が低く、－②が高くなることがβ系列のアクセント特徴ということになる。言い切り形は、このアクセント特徴の上に、文節末の拍を低くするという文レベルの音調が被さるだけである。たとえば２拍名詞が単独で○○（たとえば「うみ。」）と発音されるのは、－②が高いという語アクセントの特徴と、文節末拍が低いという文末音調が組み合わさったに過ぎない。

以上の観察を自律分節音韻論に基づいて分析すると、次のようになる。まず基本メロディーはα系列と同じくＨＬＨとみなすことができる。ただし、この音調はα系列のように文節末から付与されるのではなく、語末から付与され、さらに語末拍を音韻的に不可視(invisible)として音調付与のドメインから隠さなくてはいけない。つまりＨＬＨを単語単位で、かつ語末拍を除いて、右から左へ付与するのである。図示すると（１１）のようになる（<μ>は音韻的に不可視な拍を意味する）。この「音韻的に不可視」という考え方は一見するとアドホックなように見えるが、後述する他の集落（上嘉鉄、阿伝、塩道）の分析にも有用であることから、一般性に欠けるとは言えない。また上で見たように、音調がα系列では文節をドメインとして音調が付与されるのに対し、β系列では語をドメインとして付与される。同一体系内でこのような組み合わせがあること自体、非常に興味深い。このことは、喜界島の近隣集落（３節以降）の体系と比較する際に重要なポイントとなる。

（１１）　…μ　μ μ μ<μ>]$_{語}$ μ μ
　　＼｜｜｜／
　　ＨＬＨ

（１１）の分析についてはもう一つ、基本メロディーがＬＨではないことを強調しておきたい。語末から数えて３拍目と２拍目の間でピッチが上昇することがβ系列の特徴であると述べたが、語のアクセント特徴はこれだけではない。もしこのピッチ上昇だけが有意な特徴であるならば、４拍名詞のＨＬＨＨ（接続形）、ＨＬＨＬ（言い切り形）に加えてＬＬＨＨ（接続形）、ＬＬＨＬ（言い切り形）という音調も許容されるはずであるが、実際には許容されない。たとえば「めえらび。」（若い娘、言い切り形）に対してインフォーマントは「めえらび。」という音調は許容されず、「めえらび。」だけを許容した。語末から４拍目のＨ音調が何らかの文音調（たとえば boundary tone）でない限り、これは語の特性とし

て説明されるべきものである。このことが（１１）においてＨＬＨを基本メロディーと設定する第一の理由である。さらに、この基本メロディーを設定することによりα系列とβ系列の共通性を捉えることも可能となる。

２．５　その他の知見

湾と中道の２つの集落については上記のことに加え、次のような事実も観察された。

２．５．１　１拍名詞

１拍名詞にはア型の区別がなく、すべてα系列の音調パターンをとる。

（１２）血(tɕi:) ①、歯(ha:)、酒(se:)、井戸(ha:)；目(mi:) ③、木(hi:) ③、家(ja:)
○○。○○が。○○が…。○○から。○○からも。

ここではα系列とβ系列が中和しているわけであるが、なぜβ系列ではなくα系列の方に統合されるのか、その理由はわからない。（１２）の語彙が（１０a）に示したβ系列２拍名詞と同じ音調を示したとしても、音声的にも音韻的にも何ら問題は生じないはずである。

（１２）に示したように、１拍名詞は助詞が付いても付かなくても、母音が伸びて全体が２拍名詞と同じ長さで発音される。これは１拍から２拍へという音韻的な長母音化であり、後述する疑問文の長母音化とは性格が異なる（２．５．３節）。疑問文に見られる長母音化は、音調パターンが決まった後で音声的に伸びるものであるが、１拍名詞の長母音化は語全体が２拍になり、２拍名詞と同じ音調パターンを持つ。つまり、音調パターンが決まる前に起こる音韻的な長母音化である。あるいは、これらの名詞はレキシコンにおいて最初から２拍名詞として登録されているのかもしれない。

２．５．２　アルファベット頭文字語のアクセント

調査語彙表以外で、いくつかの外来語とアルファベット頭文字語のアクセントを調べたところ、これらの外来語語彙はすべてβ系列であった。（１３）に言い切り形の音調を示す。

（１３）　タンバリン。チョコレート。テープレコーダー。
ピーアール（ＰＲ）。ジェーアール（ＪＲ）。シーティー（ＣＴ）。
エフビーアイ（ＦＢＩ）。ピーティーエー（ＰＴＡ）。
ワイエムシーエー（ＹＭＣＡ）。

（１３）からもわかるように、語末から３拍目が低く、２拍目が高く発音される。言い

切り形の場合には、これに加えて、文レベルの音調(boundary tone)によって文節末の拍が低くなる。また、音調付与が音節単位ではなく拍単位であることは、既に見た和語の場合と同じである。この点において、音節と拍の両方に依存する甑島方言とは異なる。参考までに甑島方言の音調を（１４）に示す。いずれも甑島方言のＡ型アクセントの発音である（cf. 注１。詳細については Kubozono 2010, 2011a/b を参照）。

（１４）タンバリン、チョコレート、テープレコーダー、ピーアール、ジェーアール、シーティー、エフビーアイ、ピーティーエー、ワイエムシーエー

ここで湾方言・中里方言の外来語がβ系列に属していることに注目したい。２．４節で見たβ系列の語彙が鹿児島方言や長崎方言ではＢ型アクセントで発音されることを考えると、これは意外な事実である。鹿児島方言や長崎方言、甑島方言では外来語は基本的にＡ型で発音される。またこれらの方言のＡ型の和語は喜界島湾方言・中里方言ではα系列となる（２．３節、２．４節）。これらの事実を前提にして方言間に対応があると仮定するならば、湾方言・中里方言の外来語はα系列に属することが予想されるのであるが、実際にはその逆である。これはなぜであろうか。

鹿児島方言などのＡ型アクセントと湾方言・中里方言のβ系列に共通する特徴は、単語の末尾（湾、中里では言い切り形の末尾）が低く発音されるということである。「チョコレート」という語を例にとると、次のようになる。実際の音調パターンは方言ごとに異なるが、語末が低く発音されるという点では共通している。これは、東京方言や近畿方言の外来語にも共通した特徴である。

（１５）鹿児島方言：　チョコレート
長崎方言：　チョコレート
甑島方言：　チョコレート
湾・中里方言：　チョコレート
東京方言：　チョコレート
近畿方言：　チョコレート

もし外来語にもう一つのア型（鹿児島方言などのＢ型、湾・中里方言のα系列、東京方言や近畿方言の平板型（無核型））が付与されていたら、次のように語末が高く発音されることになる。

（１６）　鹿児島方言：　*チョコレート
長崎方言：　*チョコレート

甑島方言：　*チョコレート
湾・中里方言：　*チョコレート
東京方言：　*チョコレート
近畿方言：　*チョコレート（高起無核）
　　～*チョコレート（低起無核）

アルファベット頭文字語を含む外来語が（１６）ではなく（１５）のア型で発音されるということは、英語の単語単独発話の音調パターンと一致する。英語では単語の単独発話がすべてピッチ下降を伴って発音され、語末は常に低く発音される。たとえば chócolate という３音節語は語頭音節にアクセント（強勢）を持ち、２音節目以降が低く発音される。（１５）に見られる日本語諸方言の外来語発音は、英語のこの音声特徴（聴覚印象）を日本語の中に保持した結果と考えることができる (Kubozono 2006, 2007)。

ここで、喜界島湾・中里方言のβ系列は、言い切り形だけが語末を低く発音され、接続形ではそうならないのではないかという疑問が生じるかもしれない。たとえばチョコレートの接続形は「チョコレート」であり、語末が低くならないという点では（１６）のα系列と同じではないかという見方である。たしかに接続形と言い切り形の区別でいうと、同じβ系列でも言い切り形だけが語末が低く発音される。英語の音調パターンを借用（保持）したと考えると、どうして接続形ではなく言い切り形が外来語の借用パターンを決めるのかということが問題になる。

しかし言い切り形は単に非接続形（後ろに何も接続しない形）というだけでなく、単語の単独発話であるということも見落としてはならない。β系列に見られる語末のピッチ下降が仮に語（アクセント）の特性ではないとしても、平叙文としての単独発話において語末の音調が低くなるという事実は変わらない。英語の単語単独発話と日本語の単語単独発話の間で、語末のピッチ下降という特徴が共有されていると考えると、（１５）の事実は問題なく説明できる。

ついでながら、英語の単語単独発話に見られるピッチ下降もまた「単語」の特性ではないことを付言しておく必要がある。周知のように、英語はピッチアクセントの言語ではなく強勢アクセントの言語である。原則として強弱のパターンだけが語彙的に指定されており、ピッチの特徴（高低、上昇、下降など）は文の発話（イントネーション）で決まる。それゆえ、chocolate などの語において語末が低く発音されるという特徴は英語の語アクセントの特徴ではなく、この言語の平叙文が持つ文の韻律特徴である。語が借用される際には、原語において語の特徴か文の韻律特徴かということは問題にならず、単語単独発話の音調パターンが借用されているようなのである。

２．５．３　疑問文のイントネーション

次にアクセントとの関連で疑問文の韻律特徴について述べる[4]。鹿児島方言（木部 2010）や甑島方言（窪薗 2011）と同じように、湾・中里方言では疑問文が文末のピッチ下降によって表される。この方言の疑問文には鹿児島方言と同じく「な」という終助詞が付くようであるが、実際の発話ではこの終助詞がしばしば長母音化を起こし、「なあ」と２拍分の長さで発音される。実際の音調を表すと次のようになる。各ペアの左側が平叙文の言い切り形、右側が疑問文である。

（１７）a. α系列：がま（洞窟）。がまなあ？
はな（鼻）。はななあ？
ひぶし（煙）。ひぶしなあ？
b. β系列：うみ（海）。うみなあ？
はたな（刀）。はたなな？（～はたななあ？）

ここで次の２点に注意する必要がある。まず第一に、この方言では終助詞の「な」が「が」をはじめとする格助詞と同じように、先行要素と同じアクセント単位（音調付与ドメイン）に入る。「はな（鼻）」を例にとると、後ろに「な（あ）」が付くことによって、「はな」の音調も変わってしまう。これに対し、鹿児島方言では格助詞と終助詞はアクセント的に異なる振る舞いを見せ、同じ疑問を表す「な（あ）」は先行要素と同じアクセント単位に入らず、よって、先行要素の音調を変えることもない（（１８）に具体例を示す）。別の言い方をすると、鹿児島方言では疑問の終助詞「な（あ）」を先行要素と同じ文節に入れないが、湾・中里方言では先行要素と同じ文節に入れる。

（１８）　はな。（鼻）　はなな？　はななあ？　（cf. はなが、はなから）
はな。（花）　はなな？　はななあ？　（cf. はなが、はなから）

（１７）についてもう一つ興味深いのは、終助詞「な」の長母音化とアクセントとの関係である。「がまなあ？」という音調は「がま」に１拍助詞が付いた音調（がまが）と一致し、２拍助詞が付いた音調（がまから）とは一致しない。「ひぶしなあ？」の音調も、「ひぶし」に１拍助詞が付いた音調（ひぶしが）と一致し、２拍助詞が付いた音調（ひぶしから）とは一致しない。もし名詞の末尾母音が長母音化を起こした後にアクセント（音調）が付与されるのであれば、「がまなあ？」や「ひぶしなあ？」の音調は説明できなくなる。つまり、これらの疑問文音調は次のような過程を想定して初めて説明がつく。

[4] ここで述べることは中里方言話者の観察に基づく。

（１９）基底形	がま＋な	ひぶし＋な
アクセント付与（α系列）	がまな	ひぶしな
長母音化	がまなあ	ひぶしなあ
言い切り形（疑問）	がまなあ	ひぶしなあ

β系列の疑問形（１７ｂ）についても同様の分析ができる。

（２０）基底形	うみ＋な
アクセント付与（β系列）	うみな
長母音化	うみなあ
言い切り形（疑問）	うみなあ

この分析は、疑問を表す終助詞「な」の長母音化が音韻的なものではなく単に音声的な現象であることを意味している。この点において、２．５．１節で述べた１拍名詞の長母音化とは性格が異なる。

３　坂嶺集落のアクセント

ここまで、湾と中里の２集落についてアクセント体系の概要を見てきたが、ここからは喜界島南部･中部の他の集落に範囲を広げて集落間の異同を考察してみたい。まず湾集落、中里集落から北に約５キロのところにある坂嶺集落について述べる。この集落は北部方言の小野津集落と湾・中里集落とのちょうど中間に位置しているが、アクセント的にも湾・中里集落とは若干異なっている。今回報告するのは筆者が調査を行った一人の高年層話者[5]のデータである。なお、時間の関係で調査できなかった項目（特に接続形の音調）も少なくないことを付言しておく。

３．１　調査結果

拍を基本単位とする２型アクセント体系を持つ点では湾および中里の集落と変わらない（この点は本稿で紹介するすべての集落に共通した特徴である）。

次にα系列とβ系列の実際の音調パターンであるが、α系列については湾・中里と何ら変わらない。つまり、文節をドメインとして、最後の３拍がＨＬＨ（次末拍だけが低い）という音調パターンを示す。また湾・中里と同じく、α系列では言い切り形と接続形が同

[5] 英 啓太郎氏（79 歳、1931 年 2 月生まれ）。

じパターンを示す。言い切り形で文節末が下がらない点も湾・中里と同じである。さらに、この集落でも１拍名詞はすべてα系列であり、母音が伸長化を起こしてアクセント的には２拍名詞と同じふるまいを示す。

これに対し、β系列の音調は湾・中里集落と顕著に異なる。２拍名詞（海、鍋、舟(punI)、臼、太陽(tida)）の結果は次の通りである。

（２１）言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から～○○から[6]。○○まで。
○○からも～○○からも。○○までも～○○までも。
接続形：　○○が…。

（２２）と（２３）に３拍名詞と４拍名詞の結果を示す。前者は「刀(hatana)、畑(pateR)、あばら骨(gamaku＝がまの奥)」の語、後者は「食料(paNmeR)、若い娘(meRrabi)、天井(tINzjoR)、朝顔(asagoR)」である。

（２２）言い切り形：○○○。○○○が～○○○が。○○○も。
○○○から～○○○から。○○○まで。○○○からも～○○○からも。
○○○までも～○○○までも。
接続形：　○○○が…～○○○が…。

（２３）言い切り形：○○○○。○○○○が～○○○○が。○○○○も。
○○○○から～○○○○から。
○○○○まで～○○○○まで。
○○○○からも～○○○○からも～○○○○からも。
○○○○までも～○○○○までも。
接続形：○○○○が…。○○○○まで…。○○○○までも…。

（２１）－（２３）を通して、言い切り形と接続形の違いは湾や中里集落のものと同じであり、言い切り形では文節末の拍が低くなるのに対し、接続形は文節末まで高くなる。問題となるのが、ピッチ上昇の位置であるが、この集落は中里・湾ほどには語（名詞）の－②での上昇が顕著ではなく、むしろ文節をドメインとして－②でピッチが上昇する傾向が見られる。つまり、文節全体の後ろから３つ目と２つ目の拍の間でピッチが上昇するパターンがもっとも一般的なように見える。またピッチが上昇する前の低音調の部分も、湾・中里ではほぼ１拍に限られていたのに対し、この坂嶺方言では２拍から３拍に及ぶことが

[6] ＨＬＨＬの発音は、名詞と助詞を別々の文節に分けた（＝助詞を強調した）発音の可能性もある。

珍しくなく[7]、この点において語彙間あるいは発話間でも少なからぬバリエーションが観察された。

３．２．分析

β系列について湾・中里方言と坂嶺方言の違いをまとめると次表のようになる。

表３

湾・中里	○○。	○○が。	○○から。	○○からも。
坂嶺	○○。	○○が。	○○から～ ○○から。	○○からも～ ○○からも。
湾・中里	○○○。	○○○が。	○○○から。	○○○からも。
坂嶺	○○○。	○○○が～ ○○○が。	○○○から～ ○○○から。	○○○からも～ ○○○からも。
湾・中里	○○○○。	○○○○が。	○○○○から。	○○○○からも。
坂嶺	○○○○。	○○○○が～ ○○○○が。	○○○○から～ ○○○○から。	○○○○からも～ ○○○○からも～ ○○○○からも

この比較表からもわかるように、湾・中里方言と坂嶺方言は「－②位置での上昇」という特徴は共有しながらも、音調の付与ドメインを異としている。前者は語（名詞）の中の－②位置でピッチが上昇するのに対し、後者は文節をドメインとして－②位置で上昇が起こっている。上昇位置に注目して比較すると次のようになる( ]はドメインの右端を表す)。

（２４）β系列

湾・中里	○○○]。	○○○] が。	○○○] から。	○○○] からも。
坂嶺	○○○]。	○○○が]。	○○○から]。	○○○からも]。

この解釈が正しければ、坂嶺方言はα系列に合わせるかのように、β系列でも「単語」から「文節」へと音調付与のドメインが移行している（しつつある）ことになる。つまり、湾・中里方言では語声調的なα系列と語アクセント的なβ系列が共存していたのに対し、坂嶺方言の体系は一歩簡素化され、α系列もβ系列も語音調的な特徴を持っていると言える。

[7] たとえば３拍名詞＋１拍助詞の音調パターンは「○○○が。」であり、「○○○が。」は出てこない。４拍名詞＋１拍助詞でも、「○○○○が。」というパターンは観察されなかった。

４　上嘉鉄・阿伝・中道集落のアクセント

次に、湾集落・中里集落から坂嶺とは逆の方向に進んだところにある東海岸の集落について述べる。今回筆者が調査を行ったのは島の南端にある上嘉鉄集落と、そこから海岸線に沿って北東へ約５キロのところにある阿伝集落、さらにそこから北東約５キロのところに位置する中道集落の３つの集落である。この３集落はほぼ同じ体系と音調パターンを持っているため、この節でまとめて論じることにする。ここで報告するのは各集落１名分のデータとそれに基づく分析である[8]。

これらの３集落は、２型アクセント体系である点、音節ではなく拍を基本単位とする点では、これまで紹介した３集落（湾、中里、坂嶺）と同じである。異なるのは具体的な音調パターンであり、β系列の音調は湾・中里集落の音調と変わらないが、α系列の音調は異なっている。以下、順番に見ていくことにする。

４．１　α系列

まず２拍名詞は次のような音調を示す。具体的には「水(midu)、鳥(turi)、鼻(hana)、洞窟(gama)、山(jama)、豆(mami)、花(pana)、麦(mungi)」の語彙である（助詞の「が」「も」はそれぞれ「ぬ」「む」となるが、ここでは前者で表す）。

（２５）言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。○○からも。
○○までも。
接続形：　○○が…。

３拍～５拍名詞の音調は次のようになる。３拍名詞は「煙(hibuɕi)、踊り(udui)、形(katatɕi)；鋏(hasami)、鏡(hagami)、暦(kujumi)」の５語、４拍名詞は「暁(a:tutɕi)」、５拍名詞は「雷(haɴna:ri)」である。

（２６）言い切り形：○○○。○○○が（～○○○が）。○○○も。○○○から。
○○○まで（～○○○まで）。○○○からも（～○○○からも）。
○○○までも。
接続形：○○○が…。[○○○から…。○○○まで…。○○○からも…。][9]

---

[8] 上嘉鉄の話者は大友勝一（おおともかついち）氏、７３歳（1936 年 12 月生まれ）。阿伝の話者は麓富士男（ふもとふじお）氏、５９歳（1950 年 11 月生まれ）。中道の話者は藤原輝夫（ふじわらてるお）氏、６７歳（1943 年 6 月生まれ）である。

[9] （２６）－（２８）の［　　］内は実際のデータはなく、他の例から推定したものである。

（２７）言い切り形：　○○○○。○○○○が。○○○○。○○○○から。
　　○○○○まで。○○○○からも。○○○○までも。
　　接続形：○○○○が…。［○○○○から…。○○○○まで…。○○○○からも…。］

（２８）言い切り形：　○○○○○。○○○○○が。（～○○○○○が。）○○○○○も。
　　○○○○○から。○○○○○まで。○○○○○からも。○○○○○までも。
　　接続形：○○○○○が…。
　　［○○○○○から…。○○○○○まで…。○○○○○からも…。］

一見すると湾・中里２集落のα系列と同じように、文節をドメインとして○○○、○○○○という音調パターンが付与されているように見える。たとえば名詞単独形や名詞＋１拍助詞の音調は湾・中道集落のものと同じであり、文節末がＨＬＨという音調を持つ。しかしながらこの一般化は、助詞が２拍かそれ以上の長さを持つ場合には通用しない。この場合には、文節の次末拍ではなく、名詞（＝語）の最後の拍が低くなる。つまり上嘉鉄・阿伝・塩道では、名詞の直後が高くなることが音韻的に重要なようである（上嘉鉄の欄は上嘉鉄・阿伝・塩道の共通形を表す)。

（２９）湾・中里　○○○が。○○○から。　　○○○からも。
　　上嘉鉄　　○○○が。○○○から～○○○から。○○○からむ。

この上嘉鉄のパターンも基本メロディーはＨＬＨと分析できる。湾・中里との違いは音調付与ドメインの違いであり、上嘉鉄グループでは文節全体ではなく［名詞＋助詞の１拍目］をドメインにして右から左へＨＬＨを付与している。なおＬの部分は１拍とは限らない（ ］はドメインの右端を表す)。

（３０）湾・中里　○○○]。　○○○が]。　○○○から]。　○○○からも]。
　　上嘉鉄　　○○○]。　○○○が]。　○○○か］ら。　○○○か］らむ。

上嘉鉄グループの音調パターンを（８）と同じように分析すると（３１）のようになる[10,11]。

[10]（３１）と関連してもう一つ、湾・中里のα系列と違い、上嘉鉄グループのα系列は言い切り形と接続形が異なるようである。名詞＋２拍助詞、名詞＋３拍助詞では、接続形が助詞の最後まで高く発音されるのに対し、言い切り形では助詞の最終拍が低く発音される。湾・中里では言い切り形も低く終わらないが、これとは対照的である。この理由は、湾・中里のα系列が文節の最後でＬＨを実現し、Ｈが常に１拍であるため、言い切り形でもこの拍を低くすることはできないことによる。これに対し、上嘉鉄グループのα系列はＬＨのＨが文節末の複数拍に

ここでも、長い語句においては左端のＨ音調は左（＝文節頭）へ、右端のＨは右（＝文節末）へ向かって拡張する。また<μ…μ>は助詞の２拍目以降が音韻的に不可視であることを意味する。助詞の付かない文節では、名詞の最終拍からＨＬＨのメロディーが付与されることになる。

（３１）…μ μ μ μ]語＋μ] <μ…μ>
＼｜｜　／
ＨＬＨ

最後に、上嘉鉄グループでも１拍名詞にα系列、β系列の型の区別はなく、ここでも１拍名詞はα系列に属し、かつ２拍名詞と同じふるまいを見せる。

４．２　β系列

β系列のアクセントは中里・湾のβ系列と基本的に同じであり、名詞の－②で上昇が起こる[12]。ただし、３拍名詞＋助詞の形では、中里や湾ほどには―②での上昇が明確ではなく、―③拍がしばしばＨもしくはM(id)と聞こえた。また「うすから」「うすまで」「ティダ（太陽）から」などではＨＨＨＬと並んでＨＭＭＬという発音も聞こえる。「がまく（腰回り）まで」も…ＨＨＨＬとならんで…ＨＭＭＬという音調が聞こえることがあった。（３２）―（３４）に２拍、３拍、４拍名詞のアクセントを言い切り形と接続形に分けて記す。

（３２）言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。
○○からも。○○までも。
接続形：　○○が…。（○○から…。○○からも…。）

（３３）言い切り形：○○○。○○○が（～○○○が～MHHL)。○○○も。
○○○から。（～がまくから LHMML)。○○○まで。
○○○からも。○○○までも。
接続形：　○○○が…。（～○○○が…。～MHHH…。）

（３４）言い切り形：○○○○。○○○○が（～○○○○が)。○○○○も。

広がるため、ＨＬＨの基本メロディーを実現しつつ、文節末拍を言い切り形として（つまり文末標識として）低く実現できる。

[11] この音調パターンをアクセント核の概念を用いて説明すると、名詞の語末拍が上げ核（次の拍を高くする性格）を持つと見ることも可能である。

[12] α系列と同列に論じるならば、単語（名詞）の後ろから３つ目の拍が上げ核を持っていると分析することが可能である。

○○○○から。○○○○まで。○○○○からも。○○○○までも。
接続形：　○○○○が…。○○○○から…。○○○○からも…。

５　まとめ

５．１　集落間比較

以上の議論をもとに、集落ごとの異同を音調タイプ別に表すと次表のようになる。湾・中里の音調パターンを A（α系列)、X（β系列）と表し、それとの異同を示したものである。A, B, X, Y の記号が表す内容については（３５）にまとめる。

表４　集落ごとのα系列・β系列のタイプ

	坂嶺	湾	中里	上嘉鉄	阿伝	塩道
α系列	A	A	A	B	B	B
β系列	Y	X	X	X	X	X

（３５）A：文節をドメインに、最後の３拍が…ＨＬＨ。
B：文節全体ではなく［単語＋助詞の１拍目］をドメインにして最後が…ＨＬＨ。
X：単語をドメインに、－②拍目で上昇
（単語の語末拍を隠して、その前で…ＨＬＨ)。
Y：文節をドメインに、－②拍目で上昇
（文末の語末拍を隠して、その前で…ＨＬＨ)。

５．２　考察

すべての集落に共通している点として次の４点をあげることができる。

（３６）a. ２型アクセント体系を持つ。
b. α系列、β系列とも基本メロディーはＨＬＨである。
c. 基本メロディーの音調は拍単位で付与される。
d. 基本メロディーは語句末から付与される。

これに対し、集落間の差異はＨＬＨという基本メロディーを付与するドメインの違いから生じる。大別すると「単語」をドメインとして付与するか、「文節」をドメインとして付与するかという違いであるが、前者は早田 (1999)の分類で語アクセント的、後者は語声調的とされる特徴である。

この付与ドメインの違いがα系列とβ系列の間に観察される集落もある。たとえば湾・

中里はα系列が文節単位（つまり語声調的）、β系列が単語単位（つまり語アクセント的）という違いを持つ。この観点から集落間差異を示したのが次表である。各集落に付与した「…時」は、集落の位置関係を示すために、島の地理的中心から見た時のだいたいの方角を時計の時針で表したものである。

表５　ＨＬＨメロディーの付与範囲（ドメイン）をもとにした分類

	坂嶺	湾	中里	上嘉鉄	阿伝	塩道
	１０時	８時	８時	６時	４時	２時
α系列	文節			語＋１μ		
β系列	文節	語				

表５に見られる集落（方言）差を喜界島全体の歴史的な変化と捉えると、アクセントのドメインについて通時的な変化が起こっていると見ることができる。アクセントの性格が語アクセント的なものと語声調的なものとの間で変化していると言ってもよい。論理的な可能性として次の３つの変遷が考えられる。

（３７）a. 文節単位（語声調）の体系から単語単位（語アクセント）の体系へ変化
b. 単語単位（語アクセント）の体系から文節単位（語声調）の体系へ変化
c. 単語単位（語アクセント）と文節単位（語声調）が混在した体系から統一的体系への変化

（３７a）は、坂嶺タイプの体系が最初にあり、そこから湾・中里タイプの体系を経て、上嘉鉄・阿伝・塩道タイプの体系へ発展してきたという見方である。この解釈では、β系列がα系列に先んじて変化したことになる。またもっとも古い体系が坂嶺集落に残っているということを含意する。

これに対し（３７ｂ）はこれと逆の方向への変化を含意し、上嘉鉄タイプが元々の体系で、そこから湾・中里タイプの体系を経て坂嶺タイプの体系が出てきたと見る。この説に立つと、現在の上嘉鉄タイプの体系はα系列が「単語＋１拍」をドメインとする分だけ、既に文節単位の体系へ進んでいることを意味する。また、全体としてα系列の変化がβ系列よりも先に進んだことになる。

（３７ｃ）はこれらの２説の折衷案とも言える仮説であるが、現在の湾・中里タイプの混合体系（α系列とβ系列でドメインが異なる体系）が最初にあって、その混合性を解消するために２方向に変化が起こったと仮定する。坂嶺集落では文節単位の体系へ統一化が図られ、一方、上嘉鉄・阿伝・塩道では単語単位の体系へ統一化が図られたという考え方である。この説は論理的には可能であろうが、なぜ最初に複雑な混合体系が存在したのか

という根本的な疑問が残る。

今の段階では以上の３つの仮説のいずれが正しいか確定することはむずかしい。次節で述べる今後の課題を検討する過程で有益な論拠が得られる可能性がある。

５．３　今後の課題

残された課題も多い。各集落について話者を増やし、また各話者からより多くのデータを得ることは言うまでもない。それに加え、次の４点がとりわけ重要だと思われる。まず第一に、集落ごとに音韻分析を進め、音調パターンの中で何が弁別的特徴なのかという問題を、核の性格（昇り核、上げ核、下げ核など）も視野に入れて分析することである（服部 1973, 上野 1999）[13]。第二に、複合語のアクセント規則を検討する必要がある。各集落がどのような複合語アクセント規則を持っているのか、集落間にどのような異同が観察されるかを探ることにより、前節で述べた歴史的変化の方向についても示唆が得られる可能性がある。

三つ目の課題として、今回報告した南部・中部地域のアクセント体系を北部地域（小野津、志戸桶）のアクセント体系と比較することをあげることができる。これは表４・５で述べた南部・中部地域の方言差を考える上でも必須の作業である。最後に、アクセント以外の音韻特徴、とりわけ分節音（母音や子音）の特徴とアクセント体系を総合して考えることが重要な課題であろう。アクセント体系の分布と分節音特徴の分布が一致する必然性はないが、方言下位区分を考える上でも、あるいは前節で述べたアクセント体系の変化を論じる上でも重要な手掛かりを与えてくれるに違いない。

参照文献

Goldsmith, John (1976) Augosegmental Phonology. Doctoral dissertation, MIT. [Garland Press, 1979].

Haraguchi, Shosuke (1977) *The Tonal Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha.

早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店。

平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界の指針社。

上村孝二 (1937) 「甑島方言の研究」『満鐵教育研究所研究要報』第11号, pp.319-348.

上村孝二 (1941) 「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66号, pp.12-15.

木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.

[13] たとえば３拍語にL_1HL_2という音調パターンが観察される場合、(i)Ｈの拍が昇り核を担う、(ii)L_1の拍が上げ核を担う、(iii)Ｈが下げ核を担う、(iv) L_2が降り核を担うという、４つの解釈が可能となる（上野 1999）。

木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—疑問文のイントネーション」小林隆・篠崎晃一（編）『方言の発見』1-20. ひつじ書房。

Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116, pp.1140-1170.

Kubozono, Haruo (2007) Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese. In: Tomas Riad and Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and Tunes. Volume 1: Typological Studies in Word and Sentence Prosody,* pp.323–351. Berlin: Mouton de Gruyter.

Kubozono, Haruo (2010) Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese. *Lingua* 120, pp.2323–2335

Kubozono, Haruo (2011a) Japanese pitch accent. In: Marc van Oostendorp, Colin Ewen, Elizabeth Hume and Keren Rice (eds.) *The Blackwell Companion to Phonology*. Vol. 5, pp.2879-2907. Malden, MA & Oxford: Wiley-Blackwell.

Kubozono, Haruo (2011b) Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese. To appear in *Linguistic Review*.

窪薗晴夫 (2011) 「アクセントとイントネーション—日本語の多様性」『人間文化』Vol. 13, pp.11-16. 人間文化研究機構。

坂口至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』5-3, pp.33-41.

上野善道 (1999) 「昇り核について」『音声学会会報』199号、pp.1-13. 日本音声学会。

上野善道 (2000) 「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4-1, pp.42-54.

上野善道 (2002a) 「喜界島諸方言の付属語のアクセント」第４回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会編『世界に拓く沖縄研究』（沖縄大会）, pp.290-298.

上野善道 (2002b) 「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』26 号, pp.1-15.